

7 その他全般的事項

{

 保健医療学研究科 保健医療学専攻
 看護学研究科 看護学専攻

}

(1) 設置計画変更事項等

設 置 時 の 計 画	変更内容・状況、今後の見通しなど
	該当なし

(注) ・ 1～6の項目に記入した事項以外で、設置時の計画より変更のあったもの（未実施を含む。）及び法令適合性に関して生じた留意すべき事項について記入してください。
 ・ 設置時の「設置の趣旨等を記載した書類」の項目に沿って作成し、それ以外の事柄については適宜項目を設けてください。（記入例参照）

(2) 教員の資質の維持向上の方策（FD活動含む）

① 実施体制

a 委員会の設置状況 ※関係規程（別紙1）

大学評価委員会
FD分科会
自己評価・評価分科会

b 委員会の開催状況（教員の参加状況含む）

平成25年5月1日現在、上記委員会の開催はないが、5月中に開催予定である。

c 委員会の審議事項等

既存の大学評価委員会において、大学院の評価についても実施の予定である。

② 実施状況

a 実施内容

学部については、

- ・ 授業方法について研究会開催の検討
- ・ 教員相互の授業参観実施検討
- ・ 授業評価アンケート項目の検討
- ・ FDフォーラムの開催の検討

大学院については、今後検討。

b 実施方法

今後、大学院の評価方法、内容等を検討予定。

c 開催状況（教員の参加状況含む）

5月に委員会を開催する。

d 実施結果を踏まえた授業改善への取組状況

今後検討予定。

③ 学生に対する授業評価アンケートの実施状況

a 実施の有無及び実施時期

大学院においては、少人数であることから、アンケート実施の是非について、検討予定。

b 教員や学生への公開状況、方法等

今後検討予定。

(注) ・ 「①a 委員会の設置状況」には、関係規程等を転載又は添付すること。
 「②実施状況」には、実施されている取組を全て記載すること。（記入例参照）

(3) 自己点検・評価等に関する事項

① 設置の趣旨・目的の達成状況に関する総括評価・所見
(別紙2)

② 自己点検・評価報告書

a 公表(予定)時期

・ 公開時期を大学評価委員会で検討中。

b 公表方法

・ 公表方法を大学評価委員会で検討中。

③ 認証評価を受ける計画

・ 大学評価委員会で検討中。

(注) ・ 設置時の計画の変更(又は未実施)の有無に関わらず記入してください。

また、「① 設置の趣旨・目的の達成状況に関する総括評価・所見」については、できるだけ具体的な根拠を含めて記入してください。

なお、「② 自己点検・評価報告書」については、当該調査対象の組織に関する評価内容を含む報告書について記入してください。

(4) 情報公表に関する事項

○ 設置計画履行状況報告書

a ホームページに公表の有無

(有 無)

b 公表時期(未公表の場合は予定時期)

(平成25 年 10月 31日)

大学全体として

本大学院においては、保健医療学研究科及び看護学研究科の1年次の授業が、設置申請時に提出した「設置の趣旨・目的」等に基づき開始された。

現時点では、大学組織運営面において順調にスタートしたというところである。

各研究科における取組みは以下のとおりである。

保健医療学研究科

保健医療学研究科では、補完代替医療の中で伝統医学に分類され長い歴史の中で経験的に有用性が認められている鍼灸・柔道整復の効果についての科学的な検証を推進することのできる人材の育成を目指している。

そのため、鍼灸や柔道整復の治療の効果に関する研究、鍼灸の研究手法に関する研究、骨・関節・靭帯・筋などの運動器の外傷・障害の評価法の研究を長年行っている教授陣により研究指導が行われていると共に、それらの基礎となる高度の専門的医療知識を修得すべく当該専門分野の教授陣による講義が並行して実施されている。

大学院設置の趣旨および保健医療学研究科の求める人材養成に合致した大学院教育が円滑に推進しているものとする。

看護学研究科

看護学研究科では、各領域の看護学をより高度に進化させるために、専門的知識獲得の筋道を理解および修得し、各領域の看護学実践課題を明確にする能力を備えた教員・実践研究者の養成を目指している。

看護界においても、各専門分野において、科学的根拠に基づく研究思考能力を身につけた人材が求められており、看護学研究科もその期待に沿うべく、国内外の看護学研究に精通した教授陣が、研究指導を担当している。特に、今年度専攻学生がいる看護情報学分野および看護管理学分野においては、開設している大学が国内では限られていることもあり、それらの専門分野の研究の充実が求められている。本看護学研究科では、学生に対して、国内のみならず海外の専門分野の研究をより深く理解するとともに、それらの研究の日本への適応についても探求するべくさまざまな機会を与えている。

将来の看護学研究をリードする能力を育成すべく、看護学の知識開発、新たな概念構築へとその礎を築いている。